1932年（昭和7年）7月21日～7月30日　の　秋田駒ケ岳　の　噴火

火山名	災害発生日	災害発生市町村
秋田駒ケ岳	1932年7月21日～7月30日	市町村別の被害の詳細は不明

噴火の経過

新火口、新噴石丘生成。泥流、降灰。樹木の枯死。有毒ガス発生。
爆発のあったのは、7月20日～25日ごろで、場所は海抜1,200mの駒ケ岳火口原（俗称石ボラ）で、爆裂口は9個で外輪山と平行して女岳の山ろくより一直線に並んでおり、そのうち1個は端麗で代表的な爆裂口をしており火山灰を堆積していたが、他は泥土を噴出し、最も大きいものは東西約20間（36m）、南北50間（91m）、水面までの深さは12間（22m）であった。各泥流口より噴出した泥流はかなり勢いが強かったようで、はん濫区域約150町歩（150ha）は樹木が約2尺（60cm）埋没し、噴出口付近東西軸約200町歩（200ha）は木の梢まで泥が付着していた。また、径1尺(30cm）ほどの岩石が飛び散り、横岳およびその付近には降灰があり、このため泥流区域の樹木は全部枯死裸木となって、一面泥土におおわれ、火口原内の草木は噴出するガスで枯死した。

参考(写真など)